

# 音楽嗜好の共有を通じた段階的な自己開示が 受容性に与える影響

中川 航輝

情報システム工学科 / 岩本・河崎研究室 / 2120030

## 研究背景

人生において、親密な人間関係を築くことが幸福感に寄与する

親密化には、自分自身について他者に伝える「自己開示」が重要<sup>[1]</sup>



現状

若者は否定される恐れから深い自己開示を避けている<sup>[2]</sup>

[1] Collins, Nancy L, Miller, Lynn Carol. Self-disclosure and liking: a meta-analytic review, Psychological bulletin, 1994.

[2] 和田実：青年の対人関係の変容 久世敏雄（編）変貌する社会と青年の心理 福村出版, 1990.

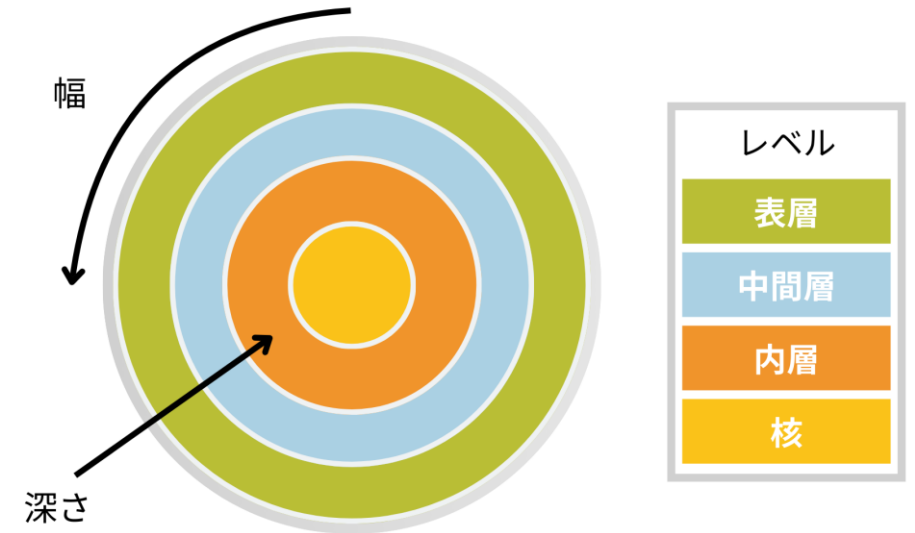
## 自己開示の深さ

「社会的浸透理論」では、自己開示には深さが存在

Poseyら<sup>[3]</sup>によると、高レベルの層を開示する前に  
低レベルから順番に行う必要がある

被開示者が肯定的な反応や理解を示す

「受容」が大切

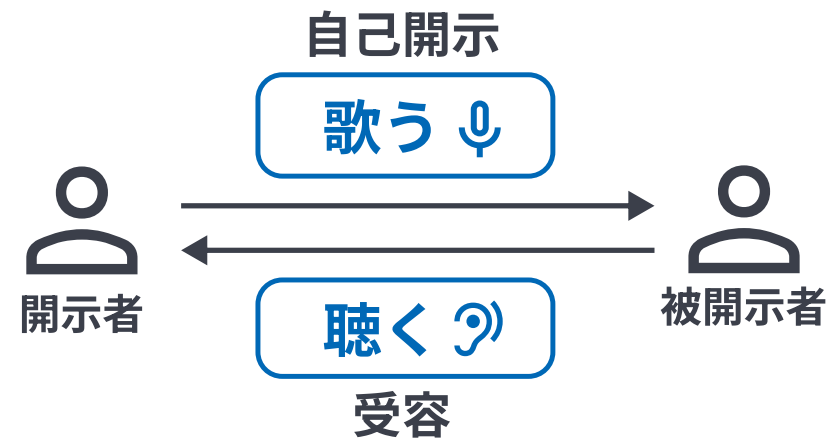


[3] Posey, C., Lowry, P. B., Roberts, T. L., Ellis, T. S. : Proposing the online community self-disclosure model: the case of working professionals in France and the UK who use online communities, European journal of information systems, 2010.

## 自己開示を促す環境

若者の自己開示の促しに「カラオケ」を活用したい

- 日常的な娯楽として利用
- 音楽を通じて自分の好みや思いを表現できる場
- 互いに「歌う」「聴く」という相互作用が明確



曲を相互に流し、その曲にまつわる話をする

→ 歌唱を伴うカラオケでは、受容への影響の分析が困難なため 音楽嗜好の共有に着目

### 目的

音楽嗜好の共有を通じた段階的な自己開示が、受容性に及ぼす影響の検証

## 仮説

---

研究目的に対し，3つの仮説を設定

仮説1

低いレベルから高いレベルへと段階的に自己開示を行うことで、  
高いレベルの自己開示への受容度が高くなる

仮説2

楽曲を知らない，または興味度が低い場合でも，受容度は大きく低下しない

仮説3

音楽嗜好の共有体験を終えた2者は，より相互理解が進む

## 実験概要

### 実験環境

カラオケを模した閉鎖的な空間

### 方法

相手と交互に音楽を流し，その楽曲について対話をする「音楽共有セッション」

段階的な自己開示を促す群と，自然に自己開示をする群 での比較実験

### 被験者

2人1ペアの友人同士，計10ペア

友人・・・普段から一緒に過ごす仲だが、深刻な悩みを打ち明けるほどの関係ではない



実験に使用した環境

## 手法

段階的な自己開示を促すため、システムで楽曲の推薦を行う

曲ごとに自己開示のレベルを設定 ← 3つの軸で整理

### 1. 思い入れ

被験者の主観で  
分類を行う

### 2. 歌える自信

被験者の主観で  
分類を行う

### 3. 人気度

Spotify Web API<sup>[4]</sup>で取得  
(客観的指標)

それぞれの組み合わせにより

自己開示のレベルを4段階で表現

自己開示レベル	思い入れ	歌える自信	人気度
1	ない	ある	高い
1	ない	ない	高い
2	ない	ある	低い
2	ある	ある	高い
3	ある	ない	高い
3	ある	ある	低い
4	ある	ない	低い
-	ない	ない	低い

[4] Spotify Web API (<https://developer.spotify.com/documentation/web-api>)

## 実験: 音楽共有セッション

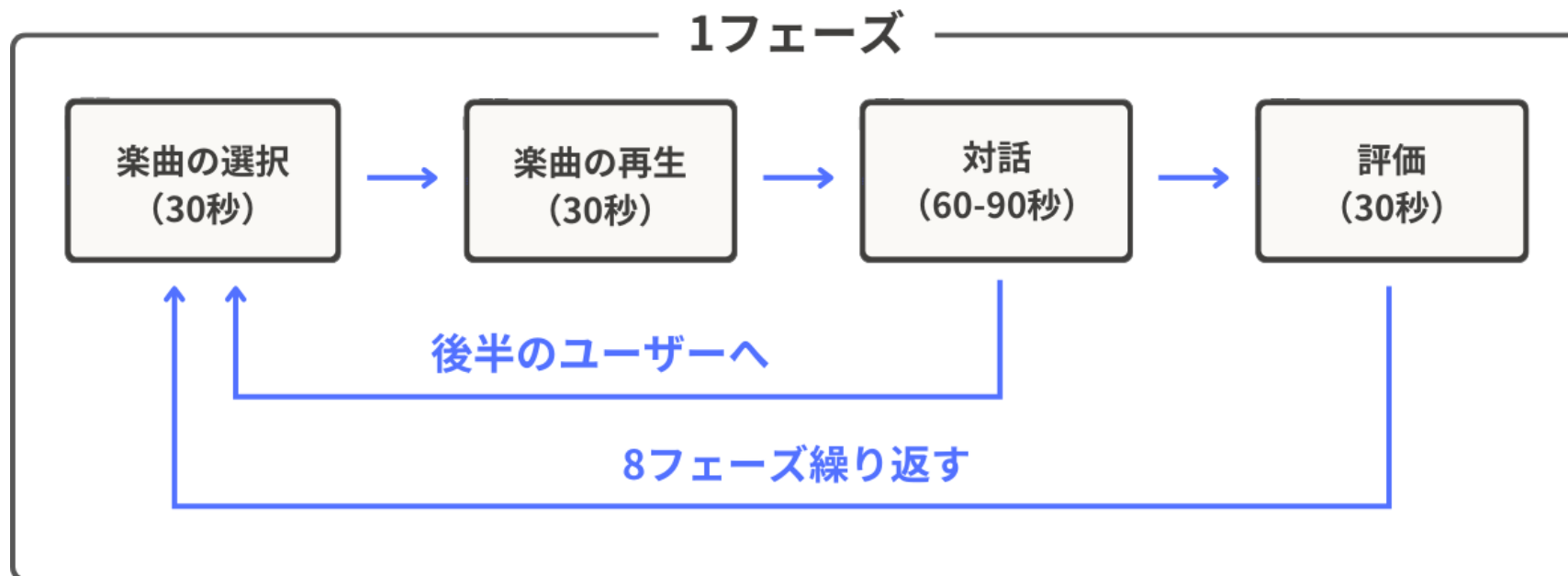
---

### 事前準備

- お気に入りの曲を50曲プレイリストに追加 → 各曲を3つの軸について分類

### 本実験

- 被験者A, B 相互の音楽共有を1フェーズとし, 計8回おこなう





## 実験: 音楽共有セッション

### 楽曲の選択: タブレット端末より

曲の自己開示のレベルを1→4へと段階的に上げる



推薦あり群: 推薦された曲から選ぶ



推薦なし群: プレイリストから自由に選ぶ

## 評価指標

---

### システムログ, アンケート, ヒアリングから仮説について分析

仮説1 低いレベルから高いレベルへと段階的に自己開示を行うことで、高いレベルの自己開示への受容度が高くなる  
→ 自己開示レベルの推移, 受容度の推移

仮説2 楽曲を知らない、または興味度が低い場合でも、自己開示への受容度は大きく低下しない  
→ 受容度と興味度の推移

仮説3 音楽嗜好の共有体験を終えた2者は、より相互理解が進む  
→ 実験後の受容度の変化, 相手への理解の変化

## 仮説1の結果

仮説1: 低いレベルから高いレベルへと段階的に自己開示を行うことで、高いレベルの自己開示への受容度が高くなる。

### 評価項目

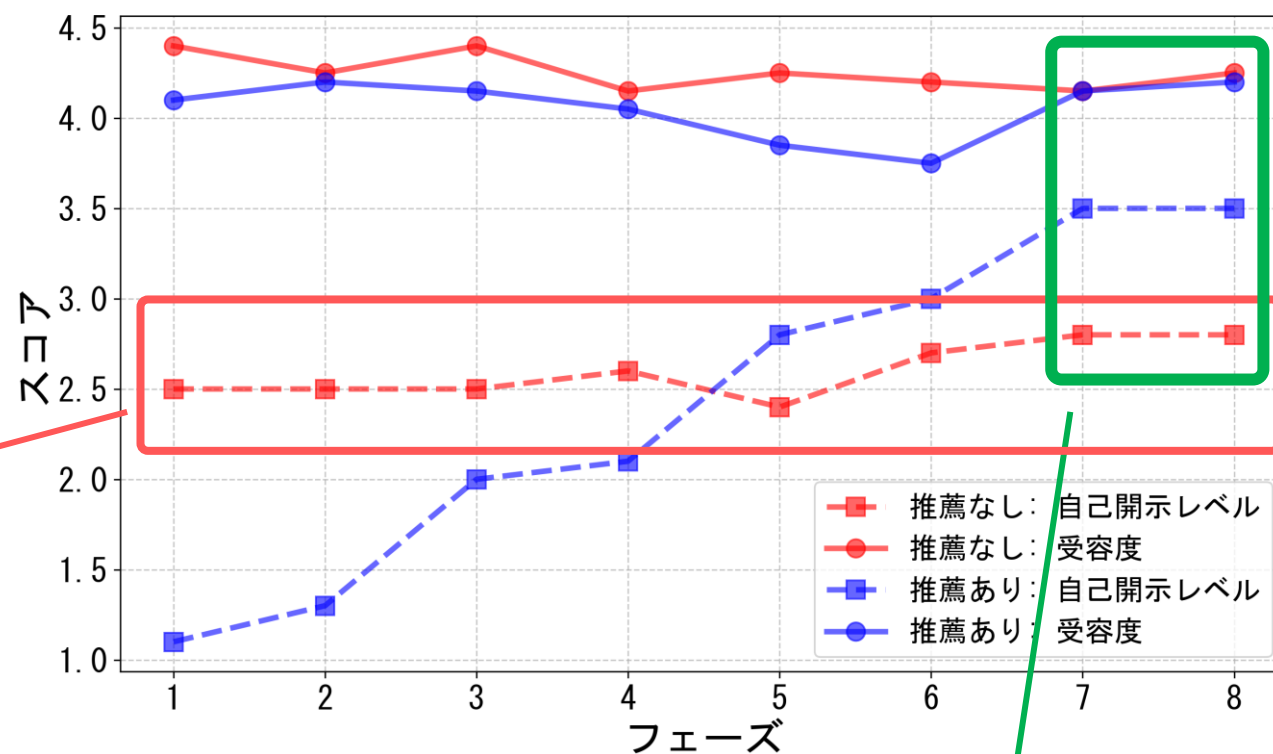
受容度 = 以下2項目の平均値 (5段階)

Q1: 相手と楽しく話げた

Q2: 相手の思い・経験が理解できた

システムによる促しがなければ  
高レベルの自己開示はできない

自己開示レベルと受容度の推移 (推薦なし/あり比較)



高い自己開示レベル (フェーズ7, 8) でも受容度は低下せず、**高い値を維持**

## 仮説2の結果

---

仮説2: 楽曲を知らない, または興味度が低い場合でも, 自己開示への受容度は大きく低下しない

### 評価項目

Q1: 相手と楽しく話できた

Q2: 相手の思い・経験が理解できた

### 曲の認知度による差

知っている曲 — 知らない曲 受容度の平均

Q1: 0.24  
Q2: 0.00 → ほとんど影響を与えない

### 曲の興味度による差

高い興味度(4~5) — 低い興味度(1~3) 受容度の平均

Q1: 0.51 (標準偏差 0.88) → 個人差が大きい  
Q2: 0.23 → あまり影響を与えない

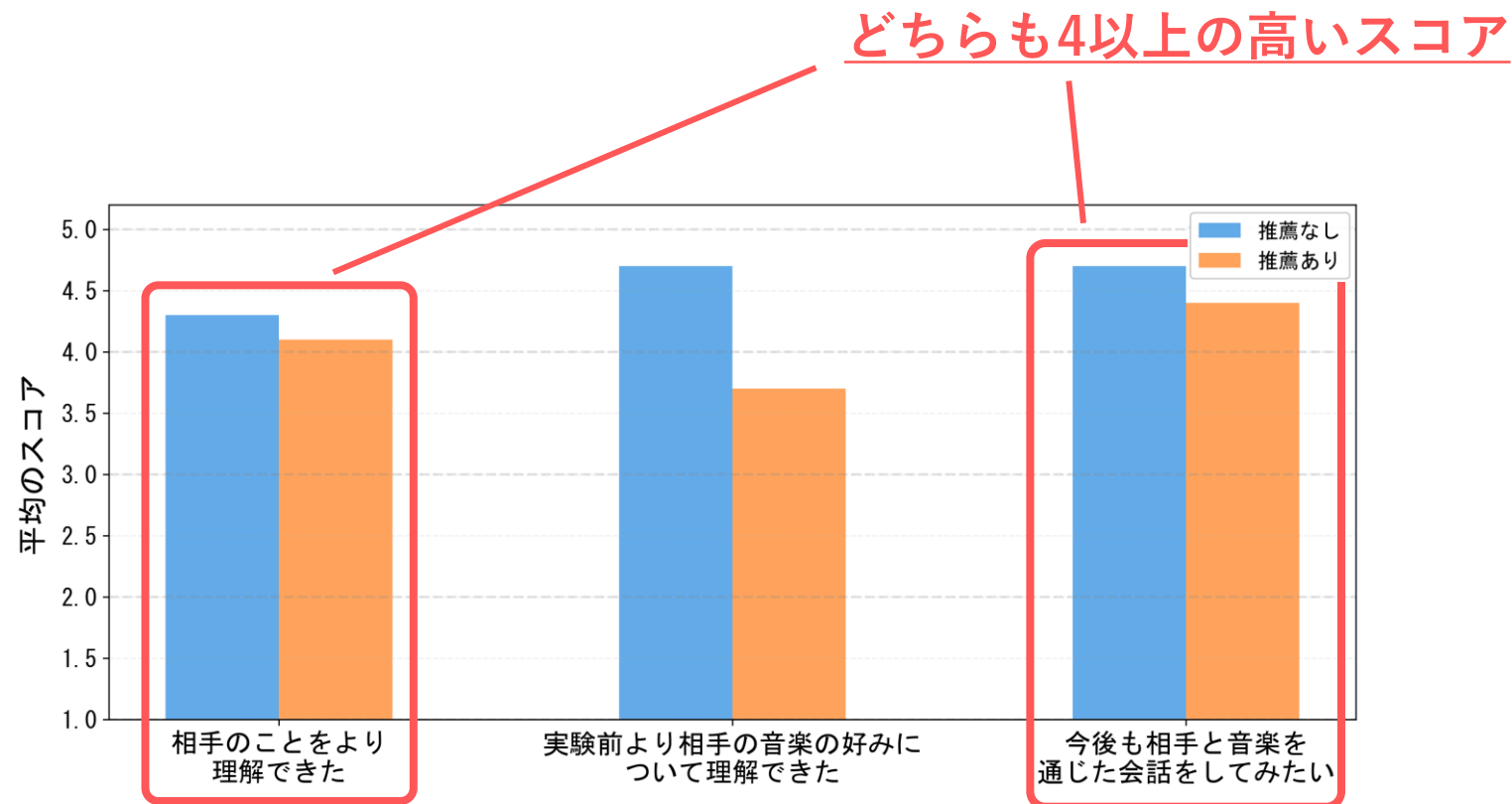
曲を知らない, あまり興味がなくても自己開示は受容される

## 仮説3の結果 (1/3)

仮説3: 音楽嗜好の共有体験を終えた2者は、より相互理解が進む

評価方法

実験後アンケート



推薦の有無に関わらず、音楽を介した会話が相互理解と会話意欲を促進

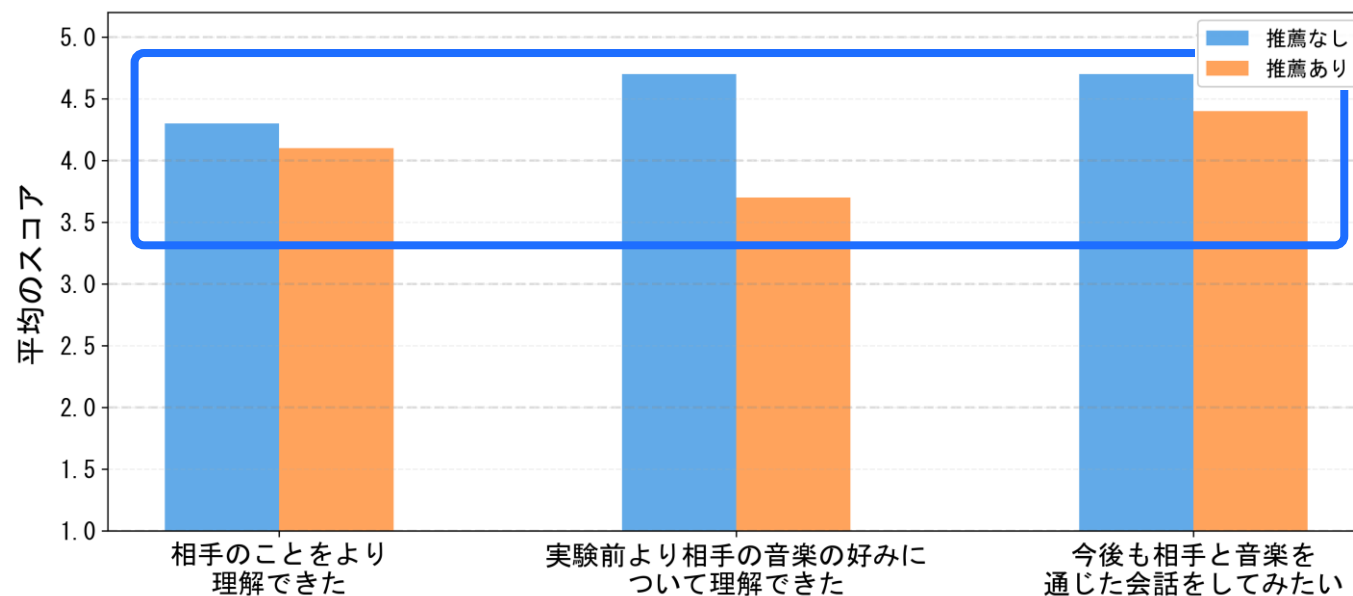
## 仮説3の結果 (2/3)

仮説3: 音楽嗜好の共有体験を終えた2者は、より相互理解が進む

### 評価方法

実験後アンケート

推薦あり群の方が全項目スコアが低かった



### 原因

ある1ペアは音楽にまつわる話をするのが難しく、スコアが極端に低かった

➡ 音楽嗜好の共有が相互理解に繋がらない人もいる

## 仮説3の結果 (3/3)

---

仮説3: 音楽嗜好の共有体験を終えた2者は、より相互理解が進む

### ヒアリングの結果

#### 推薦なし

「相手の音楽の趣味が思ったより異なることがわかった」 「相手の好きな音楽についてより深く理解できた」

➡ 音楽の**趣味や好みなどの表面的な理解**

#### 推薦あり

「相手のことを深く知ることができた」 「なぜ曲を好きになったか、曲に対する熱意を知れた」

➡ 相手の**個人的な思い出や背景への理解**

段階的なシステム推薦が、より深い相互理解の形成に寄与する可能性

## 会話のきっかけとしての音楽

---

### ヒアリングの結果

### 音楽嗜好の共有が自己開示を促進する

- 学生時代の思い出や人生における重要な出来事、恋愛体験といった個人的な経験が**自然に共有されていた**  
→ **楽曲に紐づいた個人的な経験や思い出の共有が、新たな一面の発見に繋がる**

### 音楽を通じた会話の有効性

- セッションに対して**18/20名が「楽しかった」と回答**
- 楽しめなかったという被験者は、**表面的な好みしかなく、会話を発展させることが難しかった**  
→ **曲を交互に聴き合い対話するというコミュニケーション形式が、親密化に効果的な手段**



## まとめと今後

---

### まとめ

- 仮説1, 2, 3が立証され、段階的な自己開示が受容性を向上させることが分かった
- ヒアリングより、音楽嗜好の共有を通じた自己開示はきっかけとして有効であり、  
親密度を向上させることが明らかになった

### 今後

- 歌唱を含めたカラオケでの実験を行い、より実践的な知見を得る必要がある
- 思い入れや歌いやすさなど、自己開示レベルの妥当性についての検討